兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 教育実践学フォーラム
~学校教育の諸問題と可能性を求めて~
2019 年度メインテーマ グローバル教育の目指すもの

多様性を学ぶ外国語教育を―「グローバル人材育成」は英語教育なのか―

淺川　和也

はじめに

前々回、お話をされた小関一也[1]（常磐大学）さんのご紹介で、こちらに参りました。小関さんとは、カナダ・ビクトリア大学でのデイビッド・セルビーさんによるセミナーでのご縁です。セルビーさんが、故河内徳子（大東文化大学）さんの招へいにより来日された際に、当時、英国ヨーク大学からトロント大学 OISE（Ontario Institute for Studies in Education）に移ったセルビーさんによるセミナーをカナダでしたいということになり、1995 年から 5 年間、毎年、夏、グローバル教育セミナーin カナダというのをしていました。小関さんは 1996 年に参加され、その後、トロント大学に留学されたわけです。ちなみに開発教育協会はヨーク大学のマーゴ・ブラウンさんと交流をされていました[2]。

国際理解教育学会が 1991 年に発足しています。90 年代、もう少し前だとも思いますが、人権教育や環境教育、開発教育で参加型学習への転換が提唱されはじめました。ERIC 国際理解教育センター[3]で吉田新一郎さんが、海外ゲストを招いたグローバル教育セミナーをされて、今では古典となった書物の翻訳も手がけられました。『ワールド・スタディーズ』（めこん）はそのくさわけでした。D.セルビーと G.パイクによる『地球市民を育む学習』（明石書店）など、数多く翻訳出版されています。小関さんが主となって『グローバル・クラスルーム』（明石書店）が翻訳されました。現在、セルビーさんは、英国に戻られ、プリムス大学に勤められた後、Sustainability Frontiers[4]という教育 NGO で気候変動教育にとりくんでいます。一昨年、20 年ぶりに玉川学園のアドバイザーとして来日され再会しました。

教科横断的カリキュラムと内容・方法の統合

総合的な学習の時間では、国際理解および情報、環境、福祉・環境といった教科横断的な内容が例示されていました。ワークショップでセルビーさんは、このような（民主主義を教える・学ぶのに質問はしてはいけないという教室のありさまの）絵を使って、内容と方法を統合させる重要性を述べていました。

D.セルビーらのグローバル教育については、小関さんから詳しくあったでしょうから、十分かと思いますが、仲間とともに学ぶなかで、異質な他者と出会い、参加によっ

てつながり、プロセスをたいせつにして、未来をきずいていくためのものと解釈しています。わたくしは、内容とともに、教科指導と生活指導の統合を想起していました。教科の学びをつうじて、学習集団が形成されるということです。NHK の「プロフェッショナル仕事の流儀」で放映された鹿嶋さん[5]が使っていた「権利の熱気球」は、セルビーさんによるワークショップでは定番でした。

持続可能な開発のための教育(ESD)

2005 年から 2014 年にかけて国連持続可能な開発のための教育(ESD)の 10 年がとりくまれました。その際、さまざまな分野の教育関係者が集まり、持続可能な開発のための教育推進会議(ESD-J)[6]という民間団体がつくられ、理事を務めたこともありました。教科にしばられた教育にたいして、ESD に魅力を感じたものです。文科省が示す概念図[7]と ESD-J によって示されたもののちがいは歴然ですが、本来、社会的課題にとりくむものです。並行するかのごとく、2000 年からのミレニアム開発目標（MDGs)は、SDGs となる展開をみせています。SDGs の推進には産業界からも積極的な参入があり、あらたなビジネスチャンスとなるかのようです。

国際化への対応および「グローバル人材育成」をめぐって

1974 年のユネスコ勧告もありましたが、教育の国際化政策として、帰国児童生徒の受入れとか、留学生の増大、また英語教育の振興という国際教育への変革というよりは、モノ・カネ・ヒトの国際化に対応するものであったように思えます。近年の「グローバル人材育成」が英語教育を軸にするかのように、当時も英語教育がとりざたされました。現在では、有無を言わずに実用主義になっていますが、1970 年代半ば、実用・教養をめぐる『英語教育大論争』（平泉渉・渡辺昇一 文春文庫）がありました。国際交流プログラムとしては、フード・ファッション・フェスティバルに関するものが多かったように思います。地域からの国際化への提言があったり、外国人労働者問題や、インドシナ難民や中国帰国者の定住促進からの教訓が、自治体で生かされてしかるべきだと思われます。「地球市民」という言葉がでてきたのもこの頃でしょうか。

グローバル人材育成[9]に関して「要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力、要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」と示されています。グローバル人材の要件を英語とすると、英語支配に飲み込まれてしまうでしょうし、ヨーロッパでは、英語プラス 2 つの言語を学ぶのが奨励されています。またユネスコは、グローバル・シチズンシップを提唱しています。一昨年（2018)、国連は 5 月 16 日を平和に共存する国際デー[8]としています。Living Together がグローバル時代のキーワードとされるべきではないでしょうか。ふたたび、セルビーさんが内なる旅と外なる

旅の統合とするグローバル教育を思い起こすと、曼荼羅のイメージが浮かびあがってきます。

英語教授法の変遷

さて、英語教授法の変遷をふりかえってみることにします。戦前、英国からのハロルド・パーマーによって英語を口頭で教えるオーラルメソッドが展開されたとあります。戦後は、反復練習によるパターンプラクティスにはじまり、場面シラバス、コミュニカティブアプローチなど、最近では CLIL（内容言語統合型学習）やタスク・ベース・ラーニング、プロジェクト・ベース・ラーニングなどいろいろあり、混合するのがよいとされているようです。

一方、現場では、文法訳読だったにしろ、米国の中産階級の生活を背景としたテキストにたいして、キング牧師による演説（I Have a Dream）やチャップリンによる映画、「アンネの日記」、「サウンドオブミュージック」などから自主教材が編みだされてきました。さまざまに社会的な話題もとりあげられるようになり、中高教科書にも所収されています。またかつて英作文とされていたのが、生活綴り方に学んだ教師によって、子どもたちの生活が反映されるような自己表現が実践されてきています。自分がたいせつにしているものを紹介しあったり、英文絵日記などから仲間を知り合うことにより集団づくり、それはおのずと教科指導と生活指導の統合をはかることになっていたわけです。現在、北米では協同学習やピア・メディエーションのとりくみが Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning (CASEL)[10]などによって展開されていて、成果をあげているとのことです。

加速化する英語教育施策

現在の英語教育施策の潮流は、2002 年の「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想[11]および翌年に策定された行動計画[12]にあるように思います。小学校英語や大学英語外部検定利用入試をめぐる混乱もここに端をはっしているとみることもできるのではないでしょうか。グローバル化に対応した工程表が粛々とすすんでいるといえます。同時に、2006 年教育基本法改定、2008 年からの自治体による教育振興基本計画[13]の策定もすすめられました。また 2013 年からの首相官邸による教育再生実行会議[14]の影響も色濃くあらわれています。キャリア教育[15]や「グローバル人材」[16]に関しては経済産業省にみることができます。

自治体は教育振興基本計画の履行のために英語教育改善プラン[17]をつくり、教師の英語力（英検準 1 級，TOEIC730 点）や生徒の英語力（中学校・英検 3 級/高校・英検準 2 級），「CAN-DO リスト」による目標の設定および公開・授業での生徒の英語による言語活動・「話すこと」「書くこと」へのパフォーマンステスト・授業におけ

る英語担当教員の英語使用の状況、研修実施回数・受講者の人数、教員の英語力検証のための外部検定試験実施状況について公開されるようになっています。

英語教育幻想・何のための英語教育なのか

加速化する英語教育施策の背景には、英語教育への幻想が投影されている懸念があり、久保田『英語教育幻想』（筑摩新書 2018)における指摘はきわめて重要なので、以下に項目を示しておきます。

幻想 1　アメリカ・イギリス英語こそが正統な英語である
幻想 2　ことばはネイティブスピーカーから学ぶのが一番だ
幻想 3　英語のネイティブスピーカーは白人だ
幻想 4　英語を学ぶことは欧米の社会や文化を知ることにつながる
幻想 5　それぞれの国の文化や言語には独特さがある
幻想 6　英語ができれば世界中だれとでも意思疎通できる
幻想 7　英語力は社会的・経済的成功をもたらす
幻想 8　英語学習は幼少期からできるだけ早く始めた方がよい
幻想 9　英語は英語で学んだ方がよい
幻想 10　英語を学習する目的は英語が使えるようになることだ

こうした幻想を払拭して、何のための英語教育なのかが問われなければならないでしょう。社会心理学では「幸せ」「幸福」研究が緒についたといわれます。大石『幸せを科学する』（新曜社 2009）では、人びとのつながりが幸福感をもたらすとされます。英語を学ぶことが皆の幸せとなるよう、競争ではく、人びとのつながりのため、ということがいえるのではないでしょうか。

多様な教育実践を

学習指導要領で示されている「人間性」の涵養が、英語教育でも求められるわけです。そのために多様な教育実践をすすめるためには、工程管理のための PDCA ではなく、熟達した教師の実践をコルトハーヘン（武田ら訳『教師教育学』学文社 2012）による ALACT 行為(Action)→省察(Looking back on the action)→きづき(Awareness of essential aspects) →選択肢拡大(Alternative methods of action)→試行(Trial)によるものとして読みときたい。授業の質保障ともあいまって、画一的な授業展開が多くなっていると聞きます。それでは AI による教授にとってかわられてもしかるべき、となるかもしれません。

海外（欧州）の事例から

具体的にどのようにしたらよいかということで、いくつか紹介させていただきます。欧州評議会によってつくられた人権教育の教材[18],[18]のことを、ブダペストのユースセンターでひらかれた平和教育の研修会に参加した際、知りました。英語版ほか複数言語のものが無償でダウンロードできるようになっています。日本語版も出版されています。

『アンネの日記』はアジアではとくに日本でよく読まれたとのことで、オフィサーがしばしば来日されています。2010 年にアンネ・フランク生誕 80 年を記念して 33 枚からなる組み立て式の大型パネルがつくられ、上智大学およびオランダ大使館主催により展示会が開催されました。その後、JEARN[19]という団体が管理され、輸送料負担のみでの貸出が可能になっています[20]。アンネフランクハウスでは、アンネの遺構を保存するのみならず、憎悪や不寛容にたいするための教育[21]の普及をはかっています。アンネフランクハウスによるプロジェクトのひとつ Story that move[22]は、外国にルーツを持つ人のインタビューからなるもので、ヨーロッパ歴史教育者会議[23]（EuroClio - Inspiring History and Citizenship Educators）で紹介されました。ショートフィルムをつくるメモリーウォークというのもなされていて、デジタル・シチズンシップの醸成につながるともいわれています。

ユネスコでもたくさんの教材がつくられています。最近、魅力的だと思ったものとして、24 言語で書かれた「平和」という意味の単語（文字）を学ぶというものをあげておきます[24]。また、メディア情報リテラシー教育[25]の必要性も求められています。セルビーさんによるワークショップにはフォトランゲッジによるものもありました。

さらにインターネットを介した国際協働による学習活動によって交流することが可能となります。はじまりは冷戦下において、ニューヨークとモスクワをテレビ電話でつないだものでしたが、現在では、より多様な展開がなされています。現場教師による魅力あるたくさんのプロジェクト[26]がすすめられています。

最後に、教育の意義について、ユネスコ学習権宣言(藤田訳『ユネスコ学習権宣言と基本的人権』教育資料出版会 2001)から一部引用しておえたいと思います。

> 学習権とは、読み書きの権利であり、質問し、分析する権利であり、想像し、創造する権利であり、自分自身の世界を読みとり、歴史を書く権利であり、教育の機会を接する権利であり、個人的・集団的技術をのばす権利である。―人間を、できごとのなすがままに動かされる客体から、自分たち自身の歴史を創造する主体へ変えるもの―

ありがとうございました。

URL リンク（2020.02.17）

1) http://www.tokiwa.ac.jp/~oseki/Other/Staff.html
2) http://www.dear.or.jp/uk/467/
3) http://eric-net.org
4) http://www.sustainabilityfrontiers.org
5) https://www.nhk.or.jp/professional/2007/0403/
6) http://www.esd-j.org
7) http://www.unesco-school.mext.go.jp/esd/
8) https://www.unic.or.jp/files/a_res_72_130.pdf
9) https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf
10) https://casel.org
11) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm
12) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/04031601/005.pdf
13) https://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/
14) https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/
15) https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/career-education/index.html
16) https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/global/index.html
17) https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1418086.htm
18) https://www.coe.int/en/web/compass
https://rm.coe.int/16807023d0
19) https://www.jearn.jp
20) https://gcpej.jimdofree.com/link/annefrank/
21) https://www.annefrank.org/en/education/product/63/reading-writing-with-anne-frank/
22) https://www.storiesthatmove.org/en/home/
23) https://www.euroclio.eu
24) https://en.unesco.org/writing-peace-manual/exhibition
25) http://www.unesco.org/new/en/communication-and-information/media-development/media-literacy/global-alliance-for-partnerships-on-media-and-information-literacy/
26) https://iearn.org/pages/iearn-project-book